## 1 有限温度の BCS 理論の導出の概要

grand canonical 分布を用いて平衡状態を考える。(温度 T, 化学ポテンシャル  $\mu$  は Const.)

グランドポテンシャル  $\Omega=E-TS-\mu N$  から変分法を用いて密度 op.D を定義し、 ${\rm Tr}\,D=1$  という性質で、これを用いれば分配関数と密度演算子は以下のように決められる。

$$D = Z^{-1}e^{-\beta(H-\mu N)} \tag{1}$$

$$Z = \text{Tr}\left[e^{-\beta(H-\mu N)}\right] \tag{2}$$

また演算子 O の期待値は、

$$\langle O \rangle = \text{Tr} \, DO$$
 (3)

である。これが HFB 近似のもとでは quasi-particle Hamiltonian  $H_{HFB}$  が quasi-particle 真空エネルギー  $E_0$ , quasi-particle エネルギー  $E_i$ , quasi-particle creation op. $a_i^{\dagger}$  を使って  $H_{HFB} = E_0 + \sum_i E_i a_i^{\dagger} a_i$  と表すことができることから、HFB 密度演算子と HFB 分配関数は

$$D_{\text{HFB}} = Z_{\text{HFB}}^{-1} \exp\left(-\beta \sum_{i} E_{i} \hat{n}_{i}\right) \tag{4}$$

$$Z_{\rm HFB} = \text{Tr} \left[ \exp \left( -\beta \sum_{i} E_{i} \hat{n}_{i} \right) \right]$$
 (5)

ただし、 $\hat{n}_i = a_i^\dagger a_i$ 。この分配関数を展開すれば、

$$Z_{\text{HFB}} = \text{Tr}\left[\exp\left(-\beta \sum_{i} E_{i} \hat{n}_{i}\right)\right]$$
 (6)

$$=\sum_{n_i}\prod_i e^{-\beta E_i n_i} \tag{7}$$

となるが、quasi-particle 近似において  $n_i=0,1$  であるから、 $\hat{n}_i^2=\hat{n}_i$  より、

$$Z = \prod_{i} \left( 1 + e^{-\beta E_i} \right) \tag{8}$$

と展開できる。これを使えば密度演算子は

$$D_{\text{HFB}} = Z_{\text{HFB}}^{-1} \prod_{i} \left[ e^{-\beta E_i} \hat{n}_i + (1 - \hat{n}_i) \right]$$
 (9)

となる。ここは  $n_i=0,1$  を主に用いた。Fermi 分布関数  $f_i=1/(1+e^{\beta E_i})$  を使えば、

$$D_{HFB} = \prod_{i} \left[ f_i \hat{n}_i + (1 - f_i)(1 - \hat{n}_i) \right]$$
 (10)

ここまでは quasi-particle を使っていたので変換式  $a_i^\dagger = \sum_j (U_{ij}c_j^\dagger + V_{ij}c_j)$  から逆変換を行うことで単粒子 の場合の密度とペアリングテンソルを求める。式 (3) からそれぞれ、

$$\rho_{ij} = \langle c_i^{\dagger} c_i \rangle = \text{Tr} \, D c_i^{\dagger} c_i \tag{11}$$

$$t_{ij} = \langle c_j c_i \rangle = \text{Tr} \, Dc_j c_i \tag{12}$$

これを逆変換を行いながら  $\bar{
ho}_{ij}=\langle a_i^\dagger a_i \rangle=\mathrm{Tr}\,Da_i^\dagger a_i=\delta_{ij}f_i, \bar{t}_{ij}=\langle a_j a_i \rangle=0$  を用いて計算を進めると、

$$\rho = \tilde{U}fU^* + V^{\dagger}(1-f)V \tag{13}$$

$$t = \tilde{U}fV^* + V^{\dagger}(1-f)U \tag{14}$$

のようになる。これは T=0 のときに f=0 になることから普段の BCS 方程式と一致することがわかる。ま た、このときの粒子、空孔状態のエントロピーSと粒子数Nは

$$S = -k \sum_{i} [f_i \ln f_i + (1 - f_i) \ln(1 - f_i)]$$

$$N = \text{Tr } \rho$$
(15)

$$N = \operatorname{Tr} \rho \tag{16}$$

その他の手続きはT=0のときとあまり変わらずに、Hamiltonianが、

$$H = \sum_{i} \epsilon_{i} c_{i}^{\dagger} c_{i} - \sum_{ij>0} G_{ij} c_{i}^{\dagger} c_{\bar{i}}^{\dagger} c_{\bar{j}} c_{i}$$

$$\tag{17}$$

としたときに、 $E_i=E_{ar{i}}=[(\epsilon_i-\mu)^2+\Delta_i]^{1/2}$ を用いて、

$$u_i^2 = \frac{1}{2}(1 + \epsilon_i/E_i) \tag{18}$$

$$v_i^2 = \frac{1}{2}(1 - \epsilon_i/E_i) \tag{19}$$

これをU,Vに代入してペアリングテンソルを計算すれば、

$$t_{i\bar{i}} = u_i v_i (1 - 2f_i) \tag{20}$$

$$u_i v_i = -\frac{\Delta_i}{2E_i} \tag{21}$$

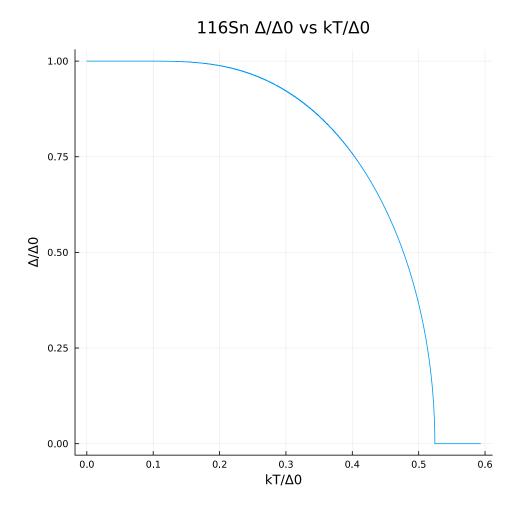
$$1 - 2f_i = \tanh(1/2\beta E_i) \tag{22}$$

よって gap 方程式は  $\Delta_i = -\sum_{k>0} G_{ik} t_{k\bar{k}}$  より、

$$\Delta = \frac{1}{2} \sum_{i>0} G \frac{\Delta}{E_j} \tanh\left(1/2\beta E_j\right) \tag{23}$$

これは T=0 のときに  $\tanh=1$  となり一致する。  $^{116}{\rm Sn}$  の時の計算結果と温度は別紙に示す。

研究名は有限温度下における Sn 核の超流動相転移解析:Woods-Saxon ポテンシャルとシニオリティペア リングモデルの応用



 $kT \simeq 0.6623 [{
m MeV}]$  より  $T \simeq 7.69 \times 10^9 [{
m K}]$